

うづみ火

長谷川時雨

青空文庫

兩國といへばにぎわ敷所しきころと聞ゆれどこ、二洲橋けうはん畔のや、上手御藏橋近く、一代の富廣とみひろき庭廣き家々もみちこほる、富人ふうじんの構えと、昔のおもかけ残る武家の邸つゞきとの片かたか側町はまち、時折車の音の聞ゆるばかり、春は回向院えかうゐんの角力すまふの太鼓夢の中に聞て、夏は富士すまふ筑波つくばの水彩畫を天ねむの後景として、見あかぬ住居すまゐさりとて向島根岸の如き不自由は無なく、娘のぞみが望かなひ、かの殿の内君とならば向河岸に隱宅いんたくた立て、と望は、あながち河向ひの唄うた女たひめらが母親達のみの夢想にもあらぬぞかし。

洗出あらひだしの木目の立た高からぬ塀にかゝりて、盛さかりはさぞと思はる、櫻の大木、枝ふりと、い、物好ひとかまへな一構、門の折戸片々いつも内より開かれて、づうと玄關迄御影の敷石、椽ゑ無んなしの二枚障子いつも白う、苔井こけゐのきわの柿の木に唯一ひかるツ、光程ひかるじゆくした實の重さうに見へる、右の方は萩垣はぎかきにしきりて茶庭ら敷折々琴の昔のもる、もゆかし。

安井別宅との門もんざつ札、扱は本町のかど通掛りの人もうなづく物持ものもち、家督は子息にゆづりて此處には半日の頃もふけし末娘、名さへ愛とよぶのと二人先代よりの持もち傳つたへ家藏はうまれつきおろか、近頃手すざるに入し無比の珍品、名畫も此娘これの爲には者もの數かずならぬ秘藏、生うまれつき附とはいへおとなし過すざるとは學校に通ひし頃も、今琴ことの稽古こにても、近所の娘が小言の引合は何時

も此家の御嬢様との噂聞に附、尚々父親の不憫増なるべし。

いつもはお庭に松葉もは入時分秋頃から御隠居様のはさみの音も聞えず、どうかなされ
た事かと拾八九の赤ら顔紫めりんすと黒の片側帯氣にしつゝめづら敷車頼に來たお三をつ
かまえて口も八町手も八町走るさすが車屋の女房の立咄、どうして〳〵御庭いぢり所
か御本宅にては御取込で御目出度けれど、此方様では秋からかけて嬢様の御病氣、御隠
居様の御心配それは〳〵實に御氣の毒でならぬ、今年は菊も好出來たけれど御客も遊ばさ
ぬ位、御茶の會御道具の會、随分忙敷時なれどまるで、火が消たやう、私らも樂すぎて
勿體無早く全快遊ばすやうにと祈つては居けれ共、段々御やつれなされてと常にも似ず
凋るゝに、それは〳〵知ぬ事とて御見舞もせなむだがさぞまあ旦那様は御心配、御可哀
想に早く御全快おさせもふし度、そして又御本宅の御取込とは御噂の有た奥様の御妹子が
御方附になるの、彼宅は御目出度事さぞ此宅の旦那様もどんなにか御うらやま敷だろふね
との同情、ほむに御隠居様も御出掛遊ばすのであつた、急で御頼申升よ御藥取に
とかけ行に、女房も無言で塵除はづして金紋の車念入に拂、あぶかりの前掛てうちん取
揃えれば亭主の仕度も出來ぬ、今迄は無沙汰したのが面目無何と御見舞言た物やらと、
獨言引出したとたんがら〳〵と淺草の市歸か勢よく五六臺、前後して通ぬけぬ。

風は寒さむいが好天氣淺草の觀音の市も大おほあたり當、川蒸汽の汽笛もたえずひゞく、年の暮近し
 世間は何と無なざわめきて今日はいぬの日、明日はねの日とりの日、扱も嫁入ぎたの多おおいこ
 事と今宵本宅の嫁の妹折枝をりえとて甘を一越た此間迄寄宿舎そだ養ち、早くから姉夫婦に引取れて
 居たので、本家の娘として此處の孫としての嫁入、進まぬながら是も義理と、ひる前に隱
 居も古銅こしょうの花瓶と、二幅對の箱と合乗でゆかれた跡あと入いりかはり替に、昨日花屋から來た松の枝
 小僧が取にくる、御上おうへの分下ぶんしたの分とわけた御膳籠ごぜんかごもは入附添の手代より目録もそれく
 行渡り役目すめば御祝酒のりおなごとも女子供にされかゝり大聲立て、ばあやにゝらまれこそ
 くくといでゆきしあしと出行跡、ばあやも跡の事心附て自慢のかね黒くと大奥様が形見かたみの鼠小紋三紋
 附着ておよろこびやら、皆々の御禮も兼て。

さ今の内お風呂ふろにでもおは入いりなさつて少し御庭でも御覽なさいまし、おやすみ遊ばして
 の内私が御附申て升柄ますからと、看護婦かはりに替かねかねかとよびて年も同十七の氣に入、差よつてほ
 つれ毛をかきあぐればほろくと涙なみだ白しろ枕まくらに毛布に、お嬢様御察申升かねは口惜てく
 彼方の奥様に喰附てやりとう御座升ごせいでい、ます、ばあやさんもばあやさんだ貴女あなたの敵におよろこび
 にゆくなむて、義理だつても私口惜貴女あなたくはなげ、御教おをし、もうし申たやうに御父様や御兄様に
 おつしやらなかつたので御座升よお嬢様、唯心で涙をこぼしていらつしやる柄猶御病氣も

重り升わと、主人ながら友達共思ふ仲よしのかうは言た物の、言過て病にさわりはせぬ
かと今更冷汗色をかえての心配顔、嬉敷に附我身のかひ無は堪兼て夜着に顔差入て忍
なき、兼が進る薬に息をついて兼やもう御言で無よ、此様な病になつた爲父様と姉様の御
仲も丸く美敷すんだのは、家の爲によるこんでいるは私、静夫様は肺病だからとて死
と定つてはなしと、言はつて下すつた物の先様でもお一人子御兩親の御不服なのは、
あたり前だわね、ちいつともうらむ事は無ねえ兼、よし折枝さんがゆかぬにした所がどう
でよそからおもらひ遊ばすのだ物、御姉様の御望をかなへた方がねそうであらふだが今
朝も父様が悲想なお顔を遊ばして、私しや自分の慾はあきらめているがせつ角父様も
ゆるして下すつて、だが父様はどうして静夫様と御知りなすつたのだろふ、兼知て居て、
知ている所か私柄と、いやまて思は思を生で心經の高ぶつて居今、先何事も胸にと、ほん
に承はれば兼がわるう御座升だが嬢様御結婚はなさらず共御心に替り無ば、お嬉しう御座
ませう静夫様も決て貴女をおわすれば、これ覺がお有でせうと取出す手箱の内香わせし白
ばら一輪、中に深雪つもる夜の明星かとばかり紫匂ふダイヤモンド、此指輪は彼人の手に
日頃光しそれよ白ばらは二人が紀念の、さゝやきし其時の息やこもるなつかしやとばかり
つく息も苦氣なり。

兼かねが涙ながら來し頃は早暮て、七間間口に並びしてふちん門もん並の附つきあひ合も廣く、此處一
 町はやみの夜ならず金きん屏びやうの松盛ふる色を示前に支配人の立たちつ居つ、何の奥様一の忠義
 振かど腹は立どさすが襟えりかき合せ店に奥に二度三度心ならずもよろこび述て拵嬢様よりと、
 包つひみほどけば、父親の好戀人の意匠、おもとの實み七づ、四分と五分の無疵むきずの珊瑚、ゑりにゑ
 りし花はな筭はなかうがい、今宵の縁女となる可、兄より祝物、それを贈おく心こころはと父親も主もばあやも顔
 見合すれば兼かねは堪かねて涙はらくこぼしつゝ外にも一品花はな嫁よめには幸に見られねど盃受
 く靜夫はわなくと、打ふるひぬ、つき上る苦くる敷しき思おもひも涙も共に唯一息眼つぶりてのみ込
 ば、又盃は嫁にりぬきらり取とり手に光物靜夫が目に入し時、花筭の片々するくとぬけ
 て、かた袖仲人が取つくろふひまも無、盃臺のわきにみぢんとなりておもとの實は、ころ
 くと靜夫しづをが袴の前にころがりぬ。
 祝儀しゅうぎすむやそこく定紋の車幾臺大川端の家にとむかへり、あわれ病人やむひとやあつしくな
 りにしがあたゝかき息こもるうばらの園そのうやさまよう、細き息の通ふばかりとや、にぎし
 き家の外にも淋さび敷しきこゝの庭木にも夜一夜木枯の吹あれて、あくるあしたよりあわれ父翁
 の面おも瘦やせ目にたちぬ。

「うづみ火」のこと

陸中國釜石鑛山内水橋康子として懸賞に應募し、明治四十三年十一月號の『女學世界第一卷第十五號定期増刊「磯ちどり」才媛詞藻冬の卷・小説』の初頭に掲載され特賞（賞金十圓）を得、又主幹松原二十三階堂（岩五郎）氏に激勵鞭撻の書簡を送らる。當時病後靜養に釜石鑛山所長横山氏家に遊行中の事なり。二十三歳の秋、處女作。未だ「しぐれ女」のペンネームを使用せず。

青空文庫情報

底本：「時代の娘」興亜日本社

1941（昭和16）年10月22日発行

1941（昭和16）年11月26日再版

初出：「女學世界第一卷第十五號定期増刊「磯ちどり」才媛詞藻冬の巻・小説」

1910（明治43）年11月号

※底本では表題の下に、「（處女作）」と入っています。

入力：門田裕志

校正：野口英司

2010年2月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

うづみ火

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>